

すっかんぽ

1995年 10月号

セイタカアワダチソウ

ゴールデンロッド (= 黄金のムチ)、原産地の北アメリカでは、そう呼ばれて親しまれている。日本へは、明治30年代に入ってきた“帰化植物”であるが、今や、すっかり日本の秋の風景として定着してしまっただろう。ススキが、夕焼けをバックに秋風にそよぐ姿もあるが、澄みきった秋空にくっきりと映える黄色い花は、野生的であると同時に、潔ささえ漂わせていることもある。広大な北アメリカの大地に、いかにも似合いそうな姿である。

ところで、このセイタカアワダチソウは、その名前の通り、3mから4mに達することもあり、少し離れた所から花を見ると、本当に泡

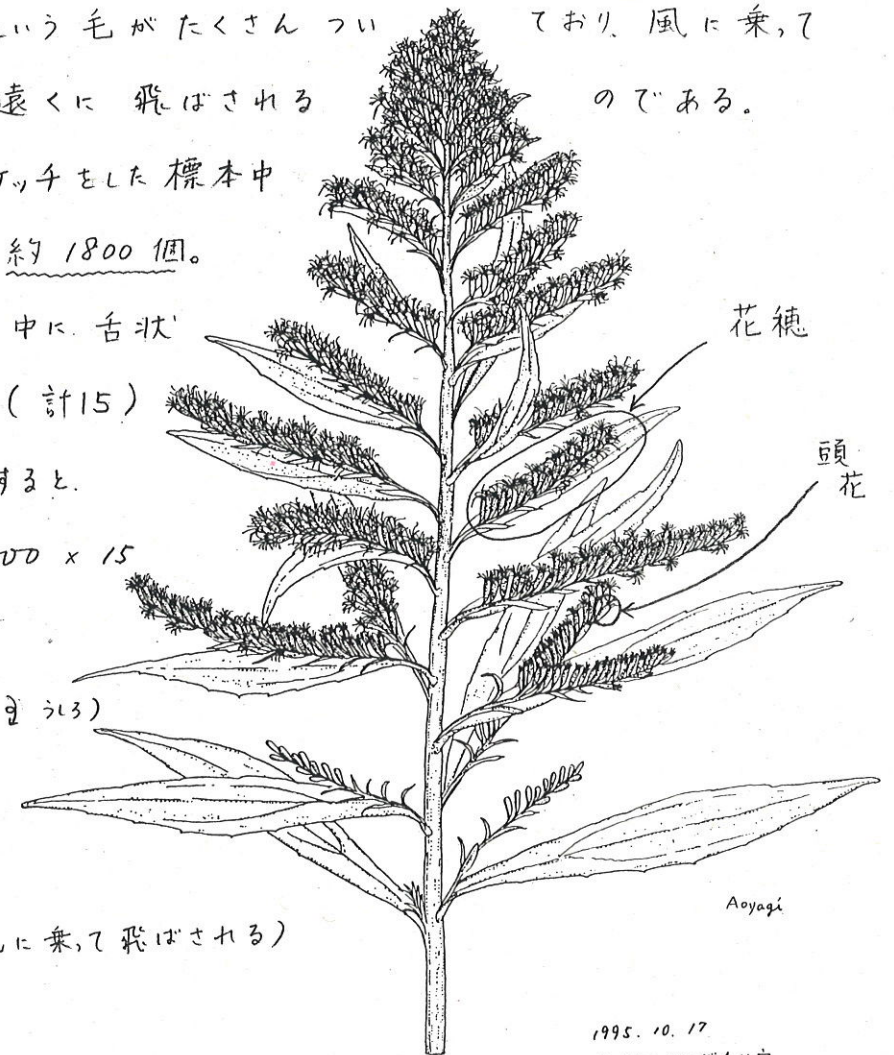
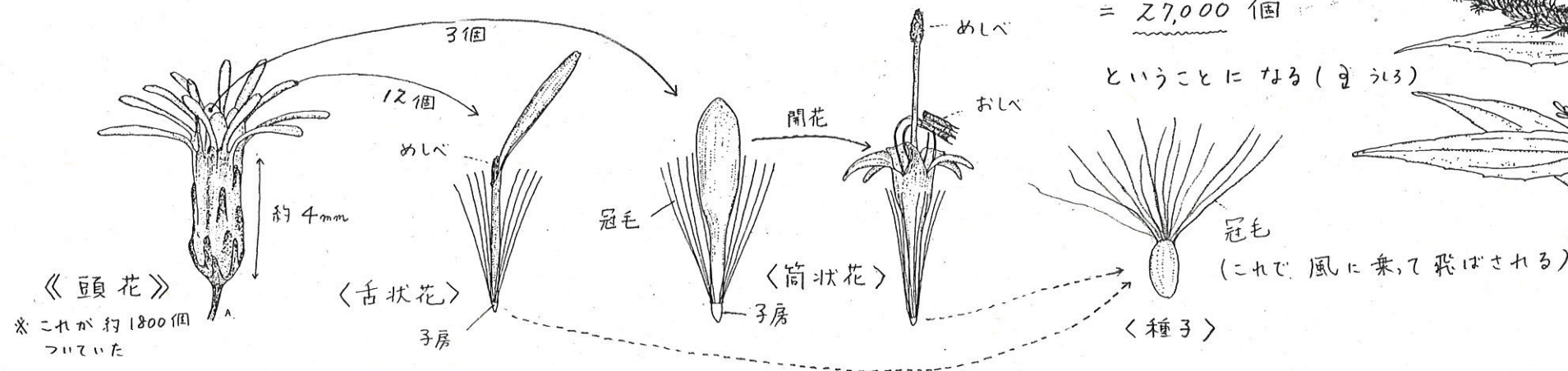
立っているように見えるから不思議である。そこで泡立つ花のしくみを調べてみることにした。まず、花を1つとり、実体顕微鏡下でバラバラにした。すると、“1つの花”だとばかり思っていたものは、さらに小さな花が集まってできていたのである。図鑑などで調べてみると、これは、キク科の植物の特徴で、舌状花と筒状花の2種類の小花が複数集まって、1つの“花”（頭花という）をつくり、さらに頭花が集まって、花穂になっているのである。

一つの小花がそれぞれ受精して、種子（厳密には、果実）ができる。種子には、冠毛という毛がたくさんついており、風に乗ってふわりふわりと遠くに飛ばされるのである。

ちなみに、このスケッチをした標本中の頭花の数は、約1800個。

一つの頭花の中に、舌状花12、筒状花3（計15）含まれると仮定すると、

種子の数は、 1800×15
 $= 27,000$ 個
 ということになる（ざっと）

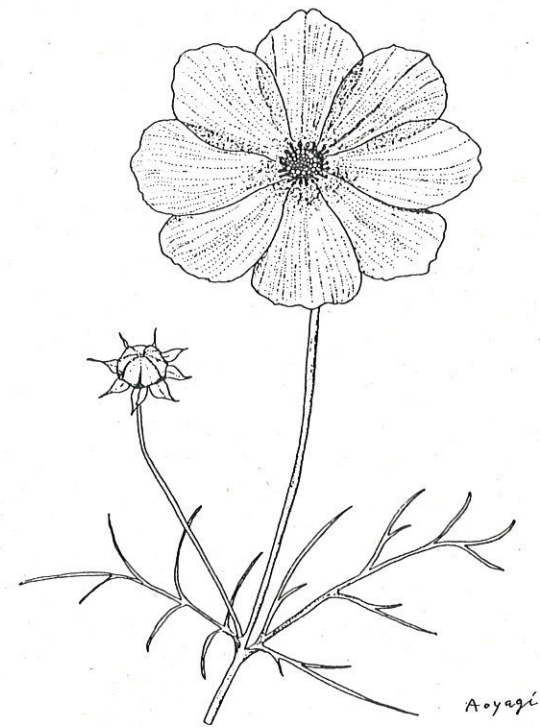


1995. 10. 17
 セイタカアワダチソウ

セイタカアワダチソウが、これほど急激に増えた原因の一つが、この高い種子生産力なのである。

しかし、それだけではない。セイタカアワダチソウには、他の植物にはない秘密兵器があったのだ。地下茎には、ポリアセチレン化合物という物質が含まれており、この物質は、他の植物の発芽や生育を抑える働きがある。まさに化学兵器を用いて、他の植物を攻撃し、強引に勢力を拡大していったのである。この作用により、数年間は、セイタカアワダチソウの天下となる。しかし繁茂しすぎると、本来なら自分以外を攻撃する手段として分泌したはずのポリアセチレン化合物が、必要以上に土の中に蓄積して今度は、自分自身を攻撃してしまうことになる。いわゆる“自家中毒”を起こして弱ったすきに、ススキなどが侵入し、やがて、セイタカアワダチソウは、完全にススキ群落に置きかわってしまうのだ。

栄枯盛衰、セイタカアワダチソウの天下もこれで終わりが、と思いきや、さにあらず。自らは滅んでも、新しくできた空き地や休耕田に向けて、急速かつ大量に種子を散布しているのである。まさに日本列島の開発の波をうまく利用し、勢力を拡大した“開発の申し子”ともいえる存在なのである。開発が続く限り、セイタカアワダチソウは、日本中で繁茂し続け、毎年秋になると、黄色い花が、そのことを我々に教えてくれるのである。



☆ コスモスも秋を代表する帰化植物の一つである。本来の繁殖力もかなり強いが、最近では人間の手で種子をまかれることにより、急速に勢力を広げている。